

【中長期目標(学校ビジョン)】

岩美高生としての誇りと自覚を持ち、何事にも「誠実」に対応でき、他者と「協働」して物事に取り組み、夢に向かって「果敢」に挑戦する人間を育成する。

【今年度の重点目標】

- 1「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現
- 2「人間性」の育成
- 3地域と連携した学校つくりと魅力化

	具体項目	令和4年度当初			評価結果(2月)		
		現状及び課題	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 「学力」Ⅱ「学ぶ力」の向上と進路実現	基礎学力の向上	【現状】 ・生徒の基礎学力の向上感は約90%を超えており、取組の方向性に期待感が増してきている。 ・基礎力診断テストのD3ゾーンの生徒数20%減を達成し、基礎学力の定着とそのための学習への取組状況が一定程度改善されてきている。 【課題】 ・生徒が向上感を覚えている場合でも、その基礎学力が高校学習水準に到達していないケースも散見される。	・生徒の学力の向上感が85%以上になっている。 ・1,2年生の基礎力診断テストにおいてD3ゾーンの生徒数が年度始めより50%以上減少している。	・各教科でのリスタート学習の取組を全体で共有して実施する。 ・基礎力診断テストにおいて事前事後の取組を行う。 ・授業アンケートの結果を踏まえて生徒の視点から学習指導を行う等の授業改善に取り組むとともに、学び方の指導も含めて生徒の主体的な学びを啓発する。	・学校評価アンケート結果(12月)によると、生徒の基礎学力の向上感は90%に近づき、保護者については76%となっている。 ・生徒が主体的に取り組める授業づくり及び全国標準レベルの基礎学力定着については取組途上である。 ・学年と各教科の連携は昨年より約16ポイント低下して59%であった。 ・1,2年生基礎力診断テスト(12月)において、D3ゾーンの生徒数が年度始めから33%減少に止まり、目標数値を下回った。事前取組は行ってテストに向かう姿勢、意味については啓発しているが、事後指導ができていない。	C	・リスタート学習の取組を質的に向上させる。 ・基礎力診断テストの分析検討会を教員研修として実施し、生徒個別面談での具体的な目標設定や課題解決につなげるとともに教科指導においても有効活用する。 ・基礎力診断テストについて事前事後の説明を行い、動機づけ及び基礎学力定着や学習習慣確立への道筋とする。
	キャリア教育の推進	【現状】 ・ジオパーク学習(1年次)やイワツツミション(2年次)等の地域探究学習及び各類型の特徴を生かしたキャリア形成支援企画等とおして、課題解決能力や自己理解支援を進めている。 【課題】 ・将来、社会人としてどのように活躍できるかについてのイメージが希薄である。 ・自分の興味・関心、適性や可能性等を見出せず、自らのキャリア形成を主体的に進められない生徒が多い。	・地域との活動をとおして様々な世代の人々と触れ合い、より広い世界に目を向けられるようになっている。 ・生徒の90%以上が本校の教育方針を認識している。 ・進路実現に向けて行動を起こしている生徒が80%以上になっている。	・担任等による個人面談及び進路指導部面談等を充実させる。 →生徒が自分では認識できていないかもしれない可能性や特長に気づかせる。 ・キャリア・パスポートを活用する。 →講演会等での気づき等を言語化・可視化することをとおして自分の興味・関心、適性等について考察させる。 →生徒の行動と実社会との関わりについて考察させ、より広い進路展望を拓かせる。	・学校評価アンケート結果(12月)によると、「本校教育方針を認識している」と回答した生徒は82.6%、「進路実現に向けて行動を起こしている」と回答した生徒は67.7%、いずれも目標数値を下回っている状況にある。 ・次年度の類型選択検討期間だけでなく、学年でポイントとなる時期にも、担任を中心として生徒面談を積極的に行った。また、担任との面談とは別に進路指導部面談も実施し、生徒の思いや希望進路に応じて専任スタッフが専門的な観点から個別にアドバイスするとともに、それらの内容を共有し、今後の戦略を練るための学年会(第2学年)を開催した。 ・キャリア・パスポートについては、保護者懇談時に保護者にもその内容等について目を通してもらう等の働きかけを行ったが、課題を克服するだけの実効性を引き出すには至っていない。	C	・進路指導部面談を継続し、生徒の自己認識の深化を支援するとともに、生徒がキャリア形成により積極的に取り組めるよう個別に具体的なアドバイスを する。 ・進路指導やキャリア形成に係る企画や事業に取り組む際、何を目的に、どのような目標に向かって取り組むのかについて、教員が共通認識を持ち、生徒に適切に動機づけできるよう進路指導部が主導する。 ・生徒の変化変容を学年の枠を超えて共有し、タイミングをとらえた個別面談に取り組む。(小規模校の強みを生かす) ・ICTも活用して、進路指導部がクラス担任の生徒指導用資料・ツール等を随時配信・提供する。
	進路実現	【現状】 ・令和3年3月卒業生の1年以内の離職率は6.3%となっている。→低い水準で推移 ・令和3年度3年生の進路目標達成率は100%。第1志望での合格・内定率は93%であった。 ・令和4年度公立鳥取環境大学入試に2名が出願し、2名ともが合格した。 【課題】 ・生徒の主体的な進路情報収集及び開拓の意識が低い状況がある。 ・現状に満足し、より高い目標にチャレンジしない生徒がみられる。	・進路目標達成率100%となっている。 ・第1志望での合格・内定率が95%以上となっている。 ・より高い目標を掲げてそれを実現するために具体的な行動する生徒が増えている。 ・就職1年以内の離職率が県平均以下となっている。(参考:令和3年3月卒業者分鳥取県平均離職率11.6%)	・進路志望調査「後」の個別指導を充実させる。 →生徒の主体的な最新進路情報の収集を啓発 →高い目標を掲げ、進路実現に果敢にチャレンジさせる指導の強化 ・各種ガイダンスや事業所説明会等を充実させる。 →狙いと目的の明確化 →社会が求める力を把握し、その力を習得するための方策を具体的に指導	・進路目標達成率は96%(1月20日現在)。このうち第1志望での合格内定率は94%であった。 ・地元である鳥取大学に1名、公立鳥取環境大学に2名、鳥取看護大学に1名合格。より高い目標を掲げてそれを実現するために具体的に行動した生徒が増えた結果と考えられる。 ・卒業生の1年以内離職率については、令和2年度3月卒業生が12.5%、令和3年度卒業生が12.2%(8月末現在)となっており、県平均を若干上回っている。 ・新型コロナウイルス感染症予防対策を徹底する観点から、進学・就職ガイダンス等について状況に応じて代替措置を実施した。 ・夏季岩美町公営塾(HOPE)を開催。19名の参加があった。午後には3年生にディスカッション演習を行った。冬季も33名の参加者で企画していたが、新型コロナ感染拡大のため中止となった。岩美町英語塾(HELLO)を2年ぶりに実施。10名の参加があり、両取組とも意欲的に参加する生徒が見られた。	C	・進路実現に関連する行事や事業の狙いや意義等について、教員間でしっかりとした共通認識を持つて臨む。 ・企画・行事等の事後指導を充実させる手立てを具体的に講じ、生徒が自らの在り方や今後について主体的に考えられる時間をより多く設ける。 ・短時間(7分前後)の生徒面談を励行し、高い目標や意欲を啓発する。
2 「人間性」の育成	基本的生活習慣とマナーの確立	【成果】 ・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は10~20%。ほとんどが軽微な違反であり、各学年で細かく指導をしている結果である。 【課題】 ・令和3年度学校評価アンケート(12月)の生徒の回答をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事の意識は高いが、授業の開始時間や集会の集合時間にルーズさが散見される。 ・令和3年度歯科検診において虫歯があると診断された52名のうち、令和4年1月時点までに通院し、治療を受けた生徒が26名(50%)となっている。	・頭髪服装指導において再検査を受けなければならない生徒が10%以下になっている。 ・挨拶、返事、頭髪服装等の基本的生活態度が良好な状態が維持され、生徒の肯定的自己評価が90%以上、職員の肯定的評価が80%以上となっている。 ・歯科検診において虫歯があると診断された生徒のうち、60%以上の生徒が通院し、治療を受けている。 ・TEASの取組を通して、ゴミの分別・減量化やエアコン等使用電力量の削減に意識して取り組むことができる。	・日常的な指導と定期的な全体指導を充実させる。 ・指導部ノートを有効活用する。 ・生徒・保護者に丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。 ・「報告・連絡・相談」を徹底し、各学年、授業担当者と緊密に連携する。 ・歯科検診後、当該生徒及び保護者に速やかな受診・治療を促すとともに、保健日より等をとおして啓発し、歯科検診前の個別指導も行う。 ・TEAS研修会を実施するとともに時宜を得て指導する。	・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は例年並み。各学年でのきめ細やかな指導成果である。 ・学校評価アンケート(12月)生徒回答結果をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事に関する意識は高い。 ・歯科検診時にその場で個別指導を行い、受診・治療を促すとともに、1学期末個別懇談時に未受診生徒保護者に受診を促した結果、受診した生徒の比率が増加した。(昨年度比)受診率も50%と昨年度の同時期と比べ増加している。 ・保健だよりを毎月発行し、歯科受診の必要性や虫歯が体に及ぼす影響などについて分かりやすい内容、身近な内容で啓発を行っている。 ・保健室掲示を通して身近な生活と結び付けて考えられるような工夫を行っており、多くの生徒が掲示物への興味関心をもっている様子がみられる。	B	・全校朝会、頭髪服装検査時に校則遵守、携帯使用のマナーについて再度徹底する。 ・些細なことを見逃さないきめ細かな指導は継続して行っていく。 ・保健だよりや保健室掲示を活用して受診の必要性を引き続き伝える。また、担任の先生方や部活動顧問の先生方の協力を得ながら、より受診率を上げられるよう連携を続けていく。 ・受診のお知らせを複数回配布し、受診の徹底を図る。 ・当該生徒を対象に保健指導を個別に行い、啓発を強化する。 ・Google Classroomを活用して保健関係情報の発信にも引き続き努める。

	部活動の振興	【成果】 ・部活動全員加入を原則としており、令和4年度当初時点で未加入者は2名。 【課題】 ・生徒数の減少に伴い、部員確保が困難な部活動がある。	・全生徒が部活動に加入している状態が継続している。 ・部活動に対する満足度が高く、忍耐力、礼儀、自己肯定感が向上している。	・部活動指導計画に基づいた適切な運営をと おし、技術向上のみならず人間的な成長を支援する。 ・本校の実態及び将来像に即した部活動の精選を進める。	・1月末段階で部活動未加入者は0名である。 ・部活動に真面目に取り組んでいる生徒の割合は減少しており、部活動を通して礼儀、マナー、忍耐力等が身に付いていると認識している生徒も減少している。	B	・部長会や全校集会等のあらゆる機会を通して部活動に係る取組についての啓発活動を行う。
	多様な生徒理解及び自己有用感の伸長	【成果】 ・SNSを巡る問題は常に少なからず発生していると認識はしているが、大きなトラブルに発展した事案は発生しなかった。 【課題】 多様な生徒理解のための取組を継続する必要がある。 (参考：令和3年度生活満足度調査結果) ・学校が安心安全な場所と感じている生徒 61% ・学校の日常生活で困っていることがある生徒 22.9% ・学習面で困っていることがある生徒 11.4%	・SNSの利用に係るマナーやモラルを守ることができている。 ・周囲に配慮した言動ができるようになっていいる。 ・学校が、生徒にとって安心で安全な場所になっている。 ・生徒一人ひとりが自己実現を目指し、あらゆる教育活動の中で生き生きと活動している。 ・全教職員が、生徒の発達段階やニーズに応じて援助・支援している。 → 岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合が80%以上となっている。	《集団指導》 ・情報モラル講演会等を早期に実施する。 ・全校集会・学年集会・HR等、あらゆる機会を通じて、スマートフォンの扱い方や、SNSの危険性について啓発活動を行っていく。 《個に応じたサポート》 ・生徒観察及びアセスメント ・個人面談や個別学習指導 ・保護者や関係機関との連携等 《教職員向け情報発信》 ・生徒の自己理解、他者理解を深め、自己有用感を高めるためのヒント等を伝える。	・hyper-QU並びに生活満足度アンケートを年2回実施。教員対象のhyper-QU結果を活用した研修会を開催し、生徒の状況について情報共有を行い、集団の中で生徒を育てるための方策を学んだ。11月に「自己理解・他者理解」をテーマにした生徒講演会並びに教職員研修会を実施した。 ・各種アンケート結果から侵害感を覚えたり学校生活に悩みを抱えたりしている生徒を抽出し、学年及びクラスと情報共有をした上で、担任や保健相談係による面談を即断的に行った。 ・生活満足度調査の結果（10月）では、「学校が安心安全な場所である」と回答した生徒は54.9%であった。（5月比-8.5%） ・学校評価アンケート（12月）の結果を見ると、岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合は68.7%であった。（昨年度比-10%） ・携帯・スマートフォンのルールやマナーに係る生徒間の意識格差については、解消にはまだ至っていない。 ・生徒から寄せられる悩みに係る話題で「教育相談だより」を構成し、毎月発行。心身の健康を図るための啓発を行うことに努めた。	C	・生徒の困り感を解消するため、日常の観察や情報共有を細やかに行い、引き続き丁寧に関に応じたサポートを継続する。 ・生徒が自己有用感を高められるような声かけやフィードバックを、すべての教職員が励行する。 ・すべての生徒が学習内容を理解できる授業を目指し、引き続き岩美高版UDを意識した指導・支援、教育環境づくりに取り組む。 ・すべての生徒が学習内容を理解できる授業及び岩美高版UDを意識した授業実践および生徒の実態を踏まえた指導上の工夫を継続的に行う。 ・多様な悩みを抱える生徒に対応するため、保護者・外部専門機関との連携をより深め、適切に対応する。
3 地域と連携した学校づくりと魅力化	10年後、20年後を見据えた岩美高校のあり方創出	【成果】 ・学校からの情報発信強化により中学校等に本校の魅力が伝わり、本年度新入生数が増加した。 ・進学及び就職実績100%を達成。国公立大学を含め4年制大学進学者の割合も増加した。 【課題】 ・本校の教育活動の魅力が十分に地域に伝わっていない。	・各類型の学習内容の魅力が効果的に発信でき、積極的に地域との交流が図れている。 ・高校が地域の方に誇りを持ってもらえるような存在になっている。 ・地域コミュニティの拠点となっている。	・岩美高校あり方検討委員会を組織し、具体的に検討する。 ・広報担当を分掌に組織し、業務の充実と効率化を図る。 ・各類型の特性をより活かした教育活動を工夫するとともに内外への広報を強化する。 ・各類型の学習内容の検証・改善を恒常的に行う。 ・生徒が地域貢献を自分事としてとらえる地域貢献活動の機会を増やす。	・学校HP、県教育委員会ツイッター等での発信を強化するとともに、学校紹介DVDやチラシを作成し、中学校を中心に積極的な広報活動を行った。 ・本校の特色や類型制の魅力等が中学校に十分に理解されている。 ・情報発信力の指標は学校内外とも70%以上を示している。 ・生徒の自主的な地域貢献活動や公営塾、部活動の取組等について全国紙、地方紙で記事化され、本校教育活動の地域認知度が高まりつつある。 ・岩美町観光ポスターやばばちゃん缶詰の取組など地域貢献活動に自主的に取り組もうとする生徒が増え、成果も挙げている。	B	・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、具体的な地域学校協働活動に着手する。 ・「岩美高校あり方検討委員会」を継続するとともに、議論内容を教職員間で随時共有し、「中学生が行きたくなる学校づくり」を実現するための具体策について検討する。
	イワッツミッションの発展・充実	【成果】 ・地域連携・貢献が生徒の育成に効果を上げていると感じている職員の割合は7割程度である。 ・地域と連携した活動に対し、概ね理解が得られ、協力体制ができている。 ・第2学年の地域探究型学習では、類型制の特徴を生かした取組を行っている。 【課題】 ・「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が低下してきている。 ・企画・調整・運営等を行う担当教員の負担が大きくなっている。	地域連携、地域貢献の取組を通して、自らが居住する地域を支える存在であることを理解している生徒を育成する。 →「地域の行事や活動に参加した延べ人数」（授業として参加するものを除く）が学校全体の生徒数以上となっている。 →地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げていると思う職員の割合が85%以上となっている。 →「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が全校の90%以上となっている。	・地域探究型学習（イワッツ・ミッション）を地域連携の核と位置付けて取組を進める。 → 活動内容を充実及びそのための授業時間の確保 → 岩美町役場等と効果的な連携を構築 ・生徒の探究的活動に係る基本的なスキルの向上を図る。 ・校内ワーキンググループを発足し、これまでの成果と課題を基にプログラムのスキーム及びフレームを再構築する。	・学校評価アンケート（12月）結果によると、「地域と連携した活動にも取り組み地域に貢献したいと思う」生徒が80.7%で目標を達成できなかった。また、「地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力育成に効果を上げている」と考える保護者が86.7%、職員が93.8%となっており、目標を達成した。 ・新型コロナウイルス感染症予防対策を徹底するため、地域連携事業や地域貢献活動の実施については限定的なものとなった。 ・過年度実践の成果と課題を踏まえ、本年度は2年次探究学習の質を一段高いレベルに設定。探究活動に係る生徒の基本的なスキル向上演習を導入し、生徒自らが抽出した地域課題解決に係る提案をすることをテーマに学習活動を展開中である。 ・探究学習の拡充深化を目指す探究学習ワーキンググループを継続し、3年間をスパンとするプログラムスキーム及びフレームの再構築が進行中である。	B	・総合的な探究の時間等を活用して、探究学習に係る生徒の基本的なスキル向上を目指す指導を計画的に実践するとともに、より効果的な指導に係る教員研修を開催し、ノウハウの共有と標準化を図る。 ・探究学習をととした生徒の自己変容の程度を確認するために、事前事後のアンケートを実施し、定性変化を追跡する。 ・学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を有効に活用し、地域住民が生徒の探究学習活動により深く関われるあり方について検討する。 ・探究学習ワーキンググループでの議論内容を随時教職員と共有し、本校における探究学習の意義及び可能性に係る教職員の理解と意識高揚を図る。
4 業務改善	校務分掌、任務分担の見直しと長時間勤務者を解消	【成果】 ・夏季休業中に対外業務停止日を3日間設定し、夏季休業中の休暇取得を促進した。 ・業務時間外は留守番電話での対応とし、職員の負担を軽減している。 ・校内掲示板の活用等により効率的な情報共有を図っている。 ・部活動の月別計画と実績表の活用により生徒の活動時間や勤務時間外の指導時間を可視化することで、業務の適正化への職員の意識が高まっている。 【課題】 ・業務改善のためのICTの活用が十分とは言えない。 ・時間外業務月45時間以上勤務者の月別平均は1.8人で令和2年度から約2割減であったが、月当たりの時間外業務時間は令和2年度比で11%増となっている。	・校務分掌再編後の任務分担の見直しができている。 ・校内掲示板とGoogle Classroomが効果的に活用できている。 ・全部活動が部活動に係る方針を守り、適切に活動している。 ・時間外業務時間が、年間360時間を超える教職員が令和3年度（5人）の半分以上になっている。	・対外業務停止日を設定する（夏季休業中、11月4日）。 ・校務分掌再編の成果と課題を検証し、業務量の適正化を図る。 ・休養日、活動時間を設定した活動方針を全部活動に徹底する。 ・時間外業務の状況を可視化する。 ・ICTを活用し、業務効率化を推進する。	・時間外業務時間の年間合計が360時間を超える教職員が1月末現在で4名となっている。 ・分掌主任を中心に校務分掌再編後の任務分担の検証を進めた。 ・ICT活用の職員研修を実施し、活用する場面が広がってきている。 ・部活動の計画段階で時間外の指導時間を点検し、教職員への意識づけを図った。大会引率による振替休日の積極的な取得を推進した。 ・衛生委員会での協議事項を必要に応じて教職員で共有し、業務改善についての自覚を促した。	C	・時間外勤務の多い教職員に声かけをし、可能な業務削減策について情報を収集し、衛生委員会等で検討を進める。 ・ICT活用のさらなる拡充のために、教職員間での活用事例の共有を進める。 ・振替休日の取得を促す。